経営探訪

MANAGEMENT REPORT

合名会社 鈴木酒造店

伝統と革新の両立 地域と融合した酒造り

全国有数の酒蔵数を誇り、“美酒王国”と呼ばれる秋田県内で5番目に古い歴史をもつ鈴木酒造店。創業は元禄二年（1689年）。宝暦には秋田藩主佐竹公より、品評会に出した酒を『秀でて良し』と激賞され、『秀よし』と命名され、嘉永元年、藩の御用酒となった。培った伝統を守る一方で、日本酒の新しい可能性を模索。鈴木直樹代表を中心に、発泡清酒「ラ・シャンテ」の開発や海外進出、外国人職員の採用等、積極的に取り組んでいる。

酒造りの真髄は地域の食文化との和合

「地域の恵みである米と水を使い、お酒は造られます。だからこそ酒蔵は、地域とともに歩み、受けた恩恵を還元するものでなければいけないと思っています」。

何よりも“地域共存”を尊ぶ鈴木代表の矜持は、直接教えを受けた祖父や父、そして来年2019年で330年を迎える蔵の歴史を受け継いだものだ。先人の資料を読み解いたり、伝え聞いたりした話によると、鈴木酒造はいつもこの地に助けられてきた。ある年、蔵のタンクから酒を抜かれて一滴もなくなり、商売ができなくなったこともある。その時、地元の人たちの支援によってその年の財政を乗り切ったという逸話は、現代の社員にも共有され、行動規範へとつながっている。

「300年以上の間、どれだけ助けられたことか。当蔵はありがたいことに、大火に見舞われたことが一度もない。だから、創業以来の酒造記録を記した酒造伝記や当時のエピソードといった貴重な資料のほとんどが残っているんですよ」。

記された酒づくりの方針は、『その地で育まれた食文化に合う日本酒』。全国に1000の蔵があるのであれば、その地域ならではの1000通りの味があるはず、というのが鈴木代表の持論だ。甘い·辛いといった時代の流行に左右されることなく、あくまでもその年に獲れた米と水から最高の味を造りだす。

「私自身を育ててくれた仙北の食文化に一番合う酒でありたい。そして、この蔵の酒が地域の食文化を守り、支えるもののひとつになれたらこんなに嬉しいことはありません」。

失敗は財産 逆境で見えた自社の強み

伝統の技と精神を受け継ぎながら、鈴木代表は従来の常識に囚われない。2010年に発売された発泡清酒「ラ·シャンテ」は、あきたこまち100%と奥羽山脈の伏流水のみで醸造されながらも、まるで白ワインのような味わいを窺わせる。新感覚の日本酒は、女性を中心に瞬く間に人気商品となった。

「私の代で発売に至りましたが、実は原点は30年前。祖父が全国各地の酒蔵とともに“米の可能性”について研究していた際に試作品として造り出されたものです。初めて飲んだときは、日本酒がこんな味を出せるのかと衝撃を受けましたね」。

同じ味を守りながら、同じ材料で全く新しい酒を生み出す―。創業から続く酒造伝記にも古今東西、さまざまな酒を研究した記録が残る。柔軟で革新的な発想を愛する企業文化も代々受け継がれてきたものなのだろう。就任以降、鈴木代表は、酒づくりだけなく販路戦略も時代に合わせて大きく舵を切った。

「祖父からは地域に還元するために、造った酒の8割は地元で売れ、と言われてきました。今でも大部分は地元で販売していますが、人口減少や高齢化といった課題は多く、次世代を考えるとそこだけのマーケットに頼り切るわけにはいきません。10年程前から、海外市場の開拓や新しいブランドの開発等、更なる販路拡大に力を入れています」。

当初は苦戦した海外販路の開拓。商談会では手応えを感じるも、いざ取引となると大手商流は固定化され、入り込む隙はなかった。それでも、地道な努力や良縁との巡り合わせにより、ようやく評判が定着。アメリカやイギリス、フランス、台湾と、徐々に参入市場を拡大させてきた。さらに国内では付加価値を高めたサブブランド「龍蟠」を立ち上げる等、代々受け継いできた技と知恵の可能性を信じ、力強く事業を牽引する。

1　最盛期には蔵人たちの酒屋唄が響き渡る
2　杉玉。新酒の時期が待ち遠しい
3　人気の「金瓢箪」。丁寧な作業で出荷される
4　蔵内にあるショップ
5　美しい自然と調和する酒蔵
表紙　鈴木代表（中央）と山崎安妙美さん（左）、アレックス·チャイルズさん（右）

酒蔵観光で盛り上げる 未来を見据えた地域共存へ

全ての事業の根幹にあるのは地域共存の想い。鈴木代表の目は、常に時代に見合った地域とのあり方を見据えている。その中で、今最も力を入れているのが酒蔵観光だ。

酒蔵の中央には米を蒸すための巨大な和釜があり、酒づくりの時期には大きな湯気が吹き上がる。奥へ進めば吟醸香が漂い、蔵人たちの酒屋唄が響き渡る。ライブ感たっぷりの五感を刺激する酒蔵見学は、人種·国籍を問わず訪れた観光客を魅了する。

「ここにあるのは豊かな自然はもちろんのこと、仙北市は県内有数の観光地で、海外からの観光客もかなり多くなってきました。酒蔵観光を通して地域文化を世界へ発信し、地域に貢献できれば」。

昨年は日本酒をこよなく愛するという秋田在住の外国人従業員を採用。日頃の業務や観光客への対応で重要な戦力となっている。また、秋田で活躍するスポーツチームや地元企業への協力も惜しまない。地域を愛し、地域に愛されてきた鈴木酒造。創業330年を目前に、その歩みは加速を続ける。

合名会社 鈴木酒造店

〒014-0207
秋田県大仙市長野字二日町九
TEL 0187-56-2121
FAX 0187-56-2124
https://www.hideyoshi.co.jp

●創業／元禄二年（1689年）
●資本金／450万円
●従業員数／29名
●営業品目／清酒の醸造および販売